

NEWS LETTER

2026. **3**
vol.52 No.2



What's New
トピックス

備える力を、
地域とともに。

浜松医科大学の防災への取り組み



備える力を、地域とともに。

浜松医科大学の防災への取り組み

南海トラフ地震に備えるために、今必要なこと

浜松医科大学が所在する静岡県は、南海トラフ地震の想定震源域の直上に位置しており、発災時には震度7クラスの激震と津波による甚大な被害が避けられません。2025年3月に内閣府が公表した最新の被害想定では、最悪の場合、全国で約29.8万人、静岡県内では10万1千人の死者が見込まれており、発災直後から既存の医療供給体制を遥かに超える傷病者が発生することが予測されています。

このような状況下では、災害拠点病院へのアクセスが寸断されるだけでなく、DMAT(災害派遣医療チーム)などの外部支援が到着するまでに数日から数週間の「空白の時間」が生じる可能性があります。この間に、適切な処置があれば助かる「防ぎ得た災害死(Preventable Disaster Death)」や、避難生活の悪化に伴う「災害関連死」をいかに防ぐかが、本地域における最大の課題です。

しかし、災害対応において真に恐れるべきは、物理的な被害だけではありません。本学健康社会医学講座の尾島俊之教授が研究代表を務める厚生労働科学研究「重層的な

保健医療福祉マネジメントに関する研究」において指摘されているように、災害時には医療・行政・消防・福祉といった各支援組織の間で「情報の分断」が発生しやすく、これが支援の遅れや漏れに直結します。

同研究では、これらの組織を横断的にマネジメントし、CSCA(指揮調整・安全・情報・評価)に基づいて指揮調整を行う体制

の重要性が科学的に示されています。効果的な災害対応には、個人のスキルアップに加え、組織の壁を越えた連携基盤、すなわち「顔の見える関係」が不可欠なのです。この理念に基づき、2023年12月、教育を媒介として地域の防災力を底上げするハブ機能をもった「地域創成防災支援人材教育センター(R-CEC)」を開設しました。



地域創成防災支援人材教育センター(R-CEC)の開設

「地域を共に守り、創る」～浜松から目指すレジリエントな社会の構築～

2023年度に、地域と緊密に連携し、災害に強い社会基盤を形成するための新たな教育研究拠点として、地域創成防災支援人材教育センター(Regional Creative Education Center for Disaster Preparation and Community Development; R-CEC)が開設されました。本センターは、医療DXの推進により救急・災害医療の強化と効率化を図るとともに、実践的な防災教育を充実させ、将来にわたり持続可能でレジリエント(強靱)な社会の構築に寄与することを目的としています。

本センターの開設は、本学が所在する静岡県が南海トラフ巨大地震の想定震源域に位置し、かつ原子力発電所が立地するという地域特性において、実践的な防災対応能力を持つ人材育成が急務であるという社会的要請に応えるものです。センター長のもと「防災救急支援部門」と「医療目利き人材養成部門」を配置し、自治体や企業と連携した体制を構築しています。今後は、潜在看護師といった地域の医療資源を最大限に活用する「地域サポートナース」、救急救命士の中でも



高度な判断力を持つ「指導救急救命士」、そして「防災士」の資格を持つ学生など、平時から有事まで地域防災リーダーとして活躍できる地域活躍人材を育成し、大学と地域との好循環を生み出すことで、実効性のある地域創成を推進してまいります。



▲ 静岡大学防災総合センターとの共催によるシンポジウム「レジリエントな社会の構築 南海トラフ巨大地震への備え」



▲ 指導救急救命士人材教育研修会



▲ 浜松市地域サポートナース研修会



▲ 秋の防災イベント「防災を考えるTKB48を知ろう」



▲ 防災食 親子クッキング講座

voice センター長より

静岡県は南海トラフ巨大地震に強く影響を受ける地域であり、また、県内には浜岡原子力発電所(御前崎市)を有しており、防災・原子力防災に対応できる人材の養成および地域住民への啓発が非常に重要です。地域創成防災支援人材教育センターは、地域の社会課題、特に感染症を含めた救急・災害医療等に対してイノベーションを起こし、地元自治体や企業など地域と共創しながら、防災支援のための地域人材を養成し、地域の課題解決を推進することを目的としています。本学の次世代創造医工情報教育センター(Nx-CEC)や学内外の組織と連携・協力しながら、地域の中核大学として、実践的な地域貢献・社会貢献を強化してまいります。



地域創成防災支援人材教育センター
三澤 清 センター長

トピックス 1-4

- 備える力を、地域とともに。浜松医科大学の防災への取り組み

研究最前線 5-6

- 胸腔鏡下手術が切除可能食道がんの新たな標準治療に～低侵襲手術の有効性を世界で初めて報告～
- 難病治験情報を患者・家族へわかりやすく届ける取り組み―「難病治験ウェブ」によるドラッグ・ロス軽減への挑戦―

公開講座ズームイン 7

- 足の血管病について

NEWS 8

- 静岡大学浜松キャンパス3部局との協定を基盤に静岡市・浜松市と連携協定を締結しました
- シミックホールディングスと包括連携協定を締結しました

退職によせて 9-10

NEWS 10

- 保健管理センターの榎本講師が旭川医科大学第24回医学奨励賞 学術奨励賞を受賞しました

新任職員の紹介 11-13

主催学会・シンポジウム 13

- 第72回日本ウイルス学会学術集会
- 第84回日本公衆衛生学会総会を開催して

学会賞等受賞 14

講座・研究室紹介 15

輝く浜松医大の学生たち 16-18

～今、活躍する学生を紹介します～

お知らせ 18

- 令和7年度浜松医科大学フォトコンテスト 結果発表

海のむこうで 19-20

- ケニアにおける国際サービスマンシップ・プログラム(ISL)とは?
- 「赤」に染まるネブラスカで学んだ、看護の情熱と実践のリアル

大学ニュース 21-24

- 各種行事 21-22
- 留学生の紹介 23
- サークル紹介 24

卒業生は今 25-26

- 地域に根ざし、世界にはばたく医師を育てる
- 産業保健師として働く中で



令和7年度 地震防災訓練・消防訓練/防災士講座



学生向け防災士講座の開講

「防災士」資格がもたらす共通言語



災害時の連携において障壁となるのが、職種や立場の違いによる「言葉と文化の壁」です。医療職、行政職員、地域住民が円滑なコミュニケーションを図るためには、共通の基盤となる知識(リテラシー)が必要です。その役割を果たすのが「防災士」の資格です。

本学は日本防災士機構の研修履修証明取扱機関として、防災士養成研修講座を開講しています。現在は主に学生を対象としており、2025年度の講座には、医学科1年生を中心に108名が参加しました。本講座の最大の特徴は、防災士として求められる気象や法制度などの基礎知識に加え、DMAT(災害派遣医療チーム)などで被災地での活動経験を持つ医師による「災害医療」に特化した講義が組み込ま

れている点です。現場を知る医療有資格者からのリアルな学びと共に、大学構内での「避難所立ち上げ実技実習」やBLS(一次救命処置)といった実践的な演習を行っています。将来医療を担う学生がこの資格を取得する意義は極めて大きく、「医療」という専門性に「防災」という広い視野が加わることで、自身の安全確保(自助)と組織的な救援活動(共助)を両立できるリーダーシップが育まれるからです。受講後のアンケートでは約8割の学生が「防災分野への関心が深まった」と回答しており、確かな手応えを感じています。今後はこの取り組みを拡大し、教職員や地域住民の皆様にも受講の機会を広げ、地域全体で共通言語を持てるよう準備を進めていく計画です。

プログラム

1日目	
1限	地震・津波による災害
2限	火山災害
3限	自主防災計画と地区防災計画
4限	災害医療とところのケア
5限	地域防災と多様性への配慮
6限	行政の災害対策と危機管理



▲ 検討ワークショップ



▲ 講義の様子

2日目	
1限	風水害・土砂災害等への備え
2限	広域・大規模火災
3限	企業・団体の事業継続
4~5限	【避難所設営演習(避難所・トイレ設置)】 地震・津波への備え 避難所の設置と運営協力
6限	防災士に期待される活動



▲ 避難所設置演習



▲ トイレ設置演習

- 対象 / 医学科1年生
- 受講者 / 108名

地震防災・消防訓練の実施

南海トラフ地震や火災の発生を想定し、地震防災訓練および消防訓練を実施しました。日中および夜間の状況を想定した訓練を通じて、発災直後に求められる初動対応や連携体制を確認しました。



▲ 災害対策本部

地震防災訓練・消防訓練 11/9(日)

11月9日(日)、南海トラフ地震による震度6強の揺れを想定し、地震防災訓練・消防訓練を約400名の教職員参加のもと実施しました。本訓練は、建物被害や火災の発生、多数の傷病者が来院する状況を想定し、災害発生初日に求められる対応を段階的に体験することで、実践力の向上を図ることを目的としています。

今年度は「確実な情報伝達と冷静な判断が命をつなぐ」を主テーマに、「本当に足りているか—備蓄を見直し、災害に備える」を副テーマに設定し、CSCATTT(指揮・安全・情報・評価を基盤に、トリアージ・治療・搬送を行う災害医療の考え方)の視点を踏まえ、大学と病院が一体となった災害対応体制の強化を重視しました。訓練では、緊急地震速報に合わせた安全確保と安否確認後、災害対策本部および各対策室を速やかに立ち上げ、情報収集、建物点検、トリアージなどの初動対応を実施しました。模擬患者を用いた災害医療訓練では、実災害を想定した緊張感の中で対応力と判断力を養いました。また、看護学科棟を想定出火場所とした消防訓練では、通報、初期消火、避難誘導に加え、水消火器や屋内消火栓の操作、AED使用訓練を行い、災害時に求められる迅速かつ確かな行動を再確認しました。訓練終了後には学長、理事、病院長による講評が行われ、全体の評価と今後の課題が共有されました。さらに浜松市消防局からも講評をいただき、実践的で実効性の高い訓練となりました。

今回得られた知見をもとに、今後も災害対応体制の改善・強化を進め、地域災害医療を支える中核機関としての役割を果たしてまいります。



▲ 消防訓練



▲ AED使用訓練

▲ トリアージ

消防訓練(夜間想定) 12/2(火)



▲ 災害対策室

▲ 搬送訓練

12月2日(火)、夜間の病棟火災発生を想定した夜間想定消防訓練を実施しました。附属病院4階東病棟で22時30分頃に火災が発生したという想定のもと、当直医師や夜勤看護師、防災センター職員などが連携し、通報、初期消火、避難誘導、災害対策室の立ち上げまで一連の行動を確認しました。搬送訓練では配置された模擬患者の状態に合わせて、エアーストレッチャーや担架を用いて避難搬送する訓練を行いました。夜間特有の少人数体制の中で、迅速かつ安全に避難誘導・搬送する難しさ、混乱する状況の中で指揮命令系統を確立することの重要性を実感し、災害時に求められる判断と協力体制の重要性を再認識する機会となりました。

voice 学長より

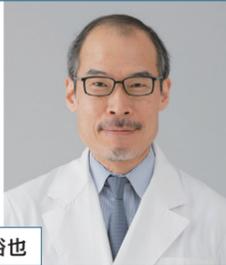
浜松医科大学が所在する静岡県は、南海トラフ巨大地震の想定震源域直上に位置し、国内有数の地震リスクを抱えています。本学は県唯一の医科大学として、地域医療の中核を担うとともに、災害医療・防災に重要な責務を負っています。防災士講座の開講など、医学知識と実践力を備えた人材育成を進めるとともに、毎年の防災訓練には土日にもかかわらず約400名の教職員が主体的に参加しています。本学は、今後も日常の備えと訓練の積み重ねを通じ、地域とともに災害に強い社会の実現に貢献してまいります。



胸腔鏡下手術が切除可能食道がんの新たな標準治療に

～低侵襲手術の有効性を世界で初めて報告～

病院長/外科学第二講座 教授 竹内 裕也



悪性腫瘍に対するわが国最大の多施設臨床研究組織である日本臨床腫瘍研究グループ(Japan Clinical Oncology Group: JCOG)の中に、JCOG食道がんグループという臓器別グループがあります。私は2023年よりこのグループ代表を務めておりますが、今回私が研究事務局として遂行いたしました多施設共同第3相ランダム化比較試験であるJCOG1409(MONET試験)の結果がThe Lancet姉妹誌であるThe Lancet Gastroenterology and Hepatology誌に2025年10月14日付けで掲載されましたのでご紹介させていただきます。

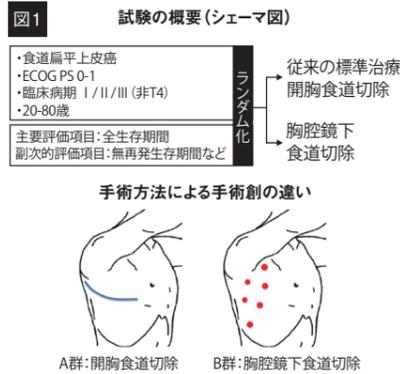
<本研究の背景>

わが国において食道がん新規患者は年間約27,000人ですが、消化器がんの中でも悪性度が高い疾患として知られており、患者さんの病期や全身状態に合わせて外科治療(手術)や薬物療法、放射線治療などを組み合わせる集学的治療が行われています。

食道がんに対する手術は、これまで開胸操作で行う食道切除術が標準治療でしたが、患者さんへの侵襲や負担が大きいと、それらを軽減することを目的として胸腔鏡下手術が開発され、徐々に普及してきました。しかし、これまで開胸手術と胸腔鏡下手術の長期成績を直接比較した臨床研究は世界的にも行われておりませんでした。

胸壁に数か所小さな穴をあけて手術を行う胸腔鏡下手術は、従来の開胸手術に比べて整容性に優れ、術後の痛みも少ないことが知られていますが、術後の合併症が増加しないか、さらにはがんの治療においてもっとも重要である「根治性」が劣っていないか、は科学的に証明する必要があります。

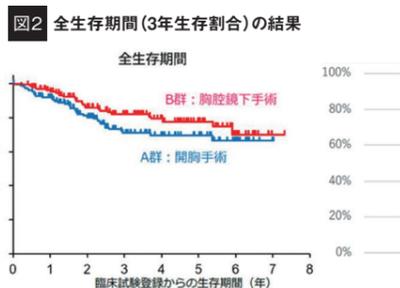
そこでJCOG食道がんグループは世界に先駆けて、胸部食道がんに対する開胸手術と胸腔鏡下手術の短期・長期成績を比較する国内多施設共同第3相ランダム化比較試験を遂行いたしました(図1)。



<研究方法と結果>

浜松医科大学を含むJCOG食道がんグループ31施設で2015年から本試験(JCOG1409)を開始しました。2022年6月に予定患者登録数の300名に到達し、登録終了となりました。本試験の主たる解析は2025年6月に実施予定でしたが、2023年6月に2回目の中間解析を実施したところ、胸腔鏡下食道切除術群の全生存期間が開胸食道切除術群に対して劣らないこと(非劣性)が統計学的に示されました[ハザード比=0.64(98.8%信頼区間0.34-1.21), p=0.000726]。この結果を受けて試験を予定よりも早期に中止し、結果を公表することにしました。

主要評価項目である全生存期間の評価では、3年生存割合で開胸食道切除術群:70.9%(95%信頼区間61.6%-78.4%)に対して、胸腔鏡下食道切除術群:82.0%(95%信頼区間73.8%-87.8%)で、胸腔鏡下食道切除術群で良好な結果でした(図2)。また開胸食道切除術群の3年無再発生存割合:61.9%に対して、胸腔鏡下食道切除術群:72.9%[HR: 0.68(95%信頼区間0.46-1.01)]と、胸腔鏡下食道切除術群で良好な傾向を示しました。



手術後の合併症については、両群で大きな違いはありませんでしたが、グレード4以上の重篤な合併症は胸腔鏡下食道切除術群で少ない傾向がみられました。また術後3か月時点での呼吸機能検査では胸腔鏡下食道切除群の方が術後の呼吸機能低下を有意に抑えられることが示されました。

<研究成果の意義>

本試験の結果、従来の開胸手術に比べて胸腔鏡下手術の治療成績が劣らないことが世界で初めて示され、より低侵襲である胸腔鏡下手術が食道がんの根治性においても優れた術式として、切除可能食道がんに対する有効な治療選択肢となり得ることが明らかになりました。

この試験の論文を受けて、日本食道学会が策定している食道癌診療ガイドラインでは速報版を発出し、「胸部食道癌に対して胸腔鏡下食道切除術を行うことを強く推奨する(エビデンスの強さA)」というステートメントを出しております。また2025年10月30日にプレスリリースを行わせていただき、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞の全国版をはじめ、60社を超えるメディアからこの研究成果を報道していただきました。

これからも食道がん外科治療や集学的治療に関する新しいエビデンスを浜松医科大学から世界に発信できるよう微力ながら精進してまいります。今後ともご指導賜りますようお願い申し上げます。

参考文献: Takeuchi H, Machida R, Ando M, Tsubosa Y, Kikuchi H, Kawakubo H, Noma K, Ueno M, Tsushima T, Bamba T, Fujita T, Hamai Y, Kakishita T, Daiko H, Koyanagi K, Matsuda S, Kato K, Sasaki K, Kita R, Kitagawa Y; JCOG1409 investigators. Thoracoscopic versus open oesophagectomy for patients with oesophageal cancer (JCOG1409 MONET): a multicentre, open-label, randomised, controlled, phase 3, non-inferiority trial. Lancet Gastroenterol Hepatol. 2025 Dec;10(12):1104-1116. doi: 10.1016/S2468-1253(25)00207-9.

難病治験情報を患者・家族へわかりやすく届ける取り組み

—「難病治験ウェス」によるドラッグ・ロス軽減への挑戦—

臨床研究センター 特任准教授 安井 秀樹



<研究の概要>

2025年7月に一般公開され、読売新聞全国版でも取り上げられた「難病治験ウェブ」について紹介します。「難病治験ウェブ」は、厚生労働省の難治性疾患政策研究事業「難病の克服に向けた研究推進と医療向上を図るための戦略的統括研究(直江班)」の一環として実施している研究事業です。本ウェブサイトは、全国で実施されている難病に関する治験情報を集約し、患者およびその家族にわかりやすく提供することで、治験参加の機会を広げ、治療薬開発の促進とドラッグ・ロスを軽減することを目的としています。

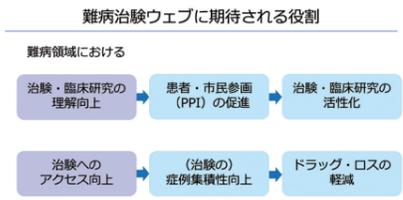
<研究の背景>

現在、日本では、海外で開発・承認された医薬品が国内では開発されず、結果として使用できない「ドラッグ・ロス」が深刻な課題となっています。とりわけ難病・希少疾患の領域では、患者数の少なさや治験実施体制の制約などにより、新規治療薬の開発や導入が遅れやすい状況にあり、患者やその家族が治験を含む治療薬開発に関する十分な情報が得にくい状況にあります。

また、治験・臨床研究に関する情報は、臨床研究等提出・公開システム(jRCT)で検索可能ですが、患者・家族にとっては利用しやすいものではなく、患者向け情報提供の充実が課題となっています。

こうした課題に対応するため、本研究

班では2024年度より、難病に関する治験・臨床研究情報を効率的かつ分かりやすく提供することにより、治療薬開発の促進とドラッグ・ロスの軽減を目指し、「難病治験ウェブ」の構築に取り組んできました。



<研究の成果>

研究班内でウェブサイト作成に関する基本方針を取りまとめ、厚生労働省、製薬工業協会、患者協議会などの関係機関との協議を経て、「難病治験ウェブ」を構築し、2025年7月8日に一般公開することができました。

「難病治験ウェブ」では、jRCTと連携し、募集中または募集予定の治験情報を毎月更新して掲載しています。疾患名、医療機関の所在地、募集状況などを条件に検索でき、専門的な知識がなくても治験情報にアクセスしやすい設計となっています。また、指定難病名や治験実施施設の地図表示など、患者・家族の視点に立った工夫が随所に盛り込まれています。

本事業は、治験情報の「見える化」を通じて情報格差を是正し、治験参加の機会を公平に提供するものです。これまで治験情報は、特定の専門医療機関や

研究者のネットワーク内に限られて共有されることも多く、患者が主体的に情報へアクセスすることは容易ではありませんでした。「難病治験ウェブ」は、こうした構造的課題を解消し、患者・家族が治療の可能性を主体的に検討するための基盤を提供しています。さらに、本取り組みはドラッグ・ロスの軽減にも寄与することが期待されます。治験への円滑な患者登録は、症例集積性の向上、治験の迅速化および質の向上につながり、結果として新規治療薬の国内開発や承認を後押しします。患者中心の情報提供と研究推進を両立させている点に、本研究事業の社会的価値があります。



▲ウェブサイト画面

<今後の展開>

今後も、患者協議会、行政機関、製薬工業界など多様な関係者と連携しながら、「難病治験ウェブ」の内容充実と利便性の向上に取り組んでいきます。難病患者とその家族が希望を持って治療や治験・臨床試験に向き合える環境づくりを進めるとともに、より多くの医療従事者・研究者の皆さまにも「難病治験ウェブ」をご活用いただきたいと思ひます。

nanbyo-chiken.nibn.go.jp



本学では毎年、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。

こちらからWEB受講できます。浜松医科大学紹介動画



今年度は「いつまでも自分の足で歩くために」をテーマに、2講義を実施しました。その中から1講義をピックアップしてご紹介します。



第二外科診療科群 病院准教授 犬塚 和徳

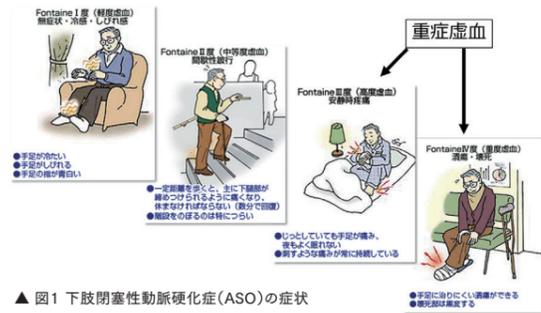
足の血管病について

立位歩行は健康的に生活していくための鍵であり、立位歩行にとって足(下肢)は大切な器官です。そのため下肢の血管病(動脈・静脈)は活動制限の原因となります。

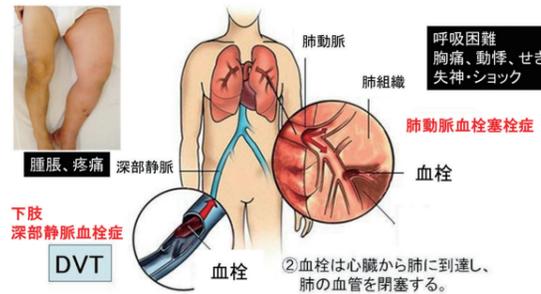
下肢の動脈疾患で最も多いのが閉塞性動脈硬化症(ASO)です。動脈硬化によって動脈が狭窄・閉塞して下肢末梢への血流障害を起こす病気で、冷感や間歇性跛行という歩行障害から始まり、重症化すると足壊疽から下肢を失う可能性もあります(図1)。動脈硬化が背景ですので、ASOの主な原因は、糖尿病、高血圧、脂質異常症、喫煙などの生活習慣病です。治療は生活習慣病の改善に加え、軽症であれば歩行運動と血管拡張作用のある抗血小板薬の内服が基本となります。重度の跛行や皮膚潰瘍・壊疽があれば血流改善のための侵襲的治療の適応となり、カテーテルを使った血管内治療(バルーン拡張、ステント留置)や外科的なバイパス術を患者さんの状況により選択します。ASO患者さんは全身の動脈も障害を受けていることが多いため、心筋梗塞、脳梗塞のリスクも高くなります。

下肢の静脈疾患の代表の1つは、深部静脈血栓症(DVT)です。下肢の深部静脈は生理的に鬱血をおこしやすく、その他のさまざまな原因も加わり、血液が固まって血栓を形成しやすいことが分かっています。DVTの主症状は緊満感のある腫脹で、ときに痛みをとまいません。片脚だけに発症することが多いのも特徴です。また下肢静脈内の血栓が血流に乗って肺動脈を閉塞(肺動脈血栓塞栓症)してしまうと、呼吸困難、胸痛、まれにショック状態となって死に至ることもあります(図2)。診断は血液検査のDダイマー、下肢血管エコー、胸部～下肢造影CTで可能です。治療の一番手は抗凝固薬の注射または内服です。古くからヘパリン、ワーファリンといった抗凝固薬が使われてきましたが、近年では副作用の少ないDOACといわれる種類の薬が開発され汎用されています。実はDVTは入院中に発症することが多く、特に手術中、手術後、けがによるベッド上安静、出産前後などが危険です。これらの入院中に弾性ストッキングを着用したり、抗凝固薬を事前投与したりするのはDVT予防のためです。

下肢の静脈疾患で最も多いのが下肢静脈瘤です。下肢静脈内の血液は足先から心臓に向かって流れていきますが、これを



▲ 図1 下肢閉塞性動脈硬化症(ASO)の症状



▲ 図2 下肢深部静脈血栓症と肺動脈血栓塞栓症

可能とするのが逆流防止機能を持った静脈弁の存在です。もし、静脈弁が壊れると静脈血は足先に向かって逆流するようになります。下肢静脈瘤の患者さんでは表在静脈の一部で静脈弁の機能不全により血液逆流が起きており、慢性的に鬱血を起こし、長い時間を掛けて下腿の表在静脈が数珠状に拡張、蛇行してきます。多くの方は無症状ですが、一部の方は倦怠感、浮腫み、こむら返りなどの不快な症状を自覚するようになり、重症化すると皮膚炎や皮膚潰瘍を起こすこともあります。弾性ストッキングを用いた圧迫療法は直ちに始められる初期治療ですが、根本的な治療は手術となります。近年はレーザーなどを使用した血管内焼灼術(図3)、シアノアクリレートを使用した血管内塞栓術といった低侵襲治療が開発され、短期入院や日帰りで治療が受けられるようになりました。



▲ 図3 下肢静脈瘤の血管内焼灼術

- ・局所麻酔
- ・皮膚切開不要
- ・治療時間30分
- ・日帰り または 短期入院
- ・治療成績が良い

若いときから健康的な生活を送ることが足の病気の予防となり、生涯歩行できることが健康寿命の延長になります。体の一番遠くにある足ですが、月に1回でもよいので、見て、気にかけてあげてください。

静岡大学浜松キャンパス3部局との協定を基盤に静岡市・浜松市と連携協定を締結しました

静岡大学浜松キャンパス3部局と部局間包括協定を締結

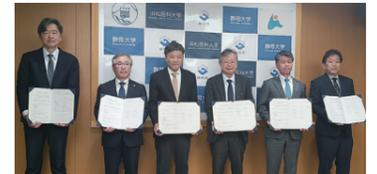
2025年11月10日(月)、国立大学法人静岡大学浜松キャンパスの3部局(工学部・情報学部・電子工学研究所)と本学医学部および光医学総合研究所は、双方の教育・研究等の機能強化および事業の発展を目指し、連携・協力するために、それぞれに部局間包括協定を締結しました。(工学部、情報学部は本学医学部と、電子工学研究所は本学光医学総合研究所との協定)



静岡大学情報学部・浜松医科大学医学部 静岡大学工学部・浜松医科大学医学部 静岡大学電子工学研究所・浜松医科大学光医学総合研究所

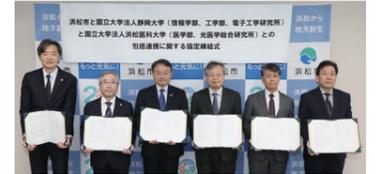
静岡市・静岡大学浜松キャンパス3部局と「医工情官・地域連携協定」を締結

2025年12月12日(金)、静岡市と本学(医学部・光医学総合研究所)と静岡大学浜松キャンパス(情報学部・工学部・電子工学研究所)が「医工情官・地域連携協定」を締結しました。静岡市の抱える医療、介護および健康分野の地域課題解決、地域社会の発展および研究等の機能強化を目指し、相互に連携・協力してまいります。



浜松市・静岡大学浜松キャンパス3部局と包括連携協定を締結

2025年12月16日(火)、浜松市と静岡大学浜松キャンパス(情報学部・工学部・電子工学研究所)と本学(医学部・光医学総合研究所)が、包括連携協定を締結しました。教育、学術研究、健康・医療・福祉、産業振興等において、相互に協力・連携し、地域社会の発展と人材育成に寄与してまいります。



シミックホールディングスと包括連携協定を締結しました

2025年11月21日(金)、シミックホールディングス株式会社と国際的な競争力を持つ新たな創薬エコシステムの構築を目的とした包括連携協定を締結しました。本協定は、両者の強みを融合し、国際的な競争力を持つ創薬研究・開発体制を浜松を拠点に構築することで、世界の医療課題に挑むことを目的としています。本協定の主な内容は、「次世代トランスレーショナルリサーチの構築」「臨床試験ネットワークの整備」「浜松医療連携モデル(医療情報)の活用」「創薬Open Innovationの創出」であり、本提携により、両者の知見と強みを融合させた「日本発・浜松発」の革新的な創薬拠点を構築します。この新たなエコシステムを活用し、主に海外の製薬企業、バイオベンチャー、アカデミアが保有する有望な研究成果(シーズ)を対象に、実用化に向けた橋渡しを加速することで、新たな治療法を一日でも早く創出し世界の医療課題の解決に貢献してまいります。近年、日本の医薬品開発は国際的な治験の流れから取り残され、「ドラッグロス」や「ジャパン・パッシング」といった課題に直面しています。本協定による新たな創薬拠点を構築を通じて、世界の医療に貢献する新たな価値を創造してまいります。





整形外科講座 教授
松山 幸弘

浜松医大17年間の思い

私が教授として浜松医大に赴任したのは2009年で、今年で17年目を迎えます。赴任後は、重度脊柱変形、脊椎髄腫瘍、OPLLなどの難解な脊椎外科手術を全て受け入れ、経験の少ない医局員と共に治療をしてきました。臨床から生じる疑問を研究として、同一の治療方針を継続することで、その功罪を明らかにする重要性を体得してもらいました。脊椎班の活発な研究発表は医局全体へ波及し、学会での演題採択やシンポジスト選出にもつながりました。患者さんを思いやる心を重んじ、術後回診やリハビリ、気持ちを盛り上げることの重要性も教えてきました。2016年より病院長を拝命し、コロナ禍、働き方改革が始まる中で病院運営に全力を尽くしました。予定手術を2週前に確定し臨時枠を設け、年間手術件数を9,000件まで増加させ、AMEC棟新設、病棟センター化、HCU設置、空床病床の共有化を進め、「9090(90%稼働・9000件手術)」を掲げ、全部署一丸となって取り組みました。この経験から人とのつながりの大切さを実感する一方、医局員と共に手術する機会が減ったことが唯一心残りです。

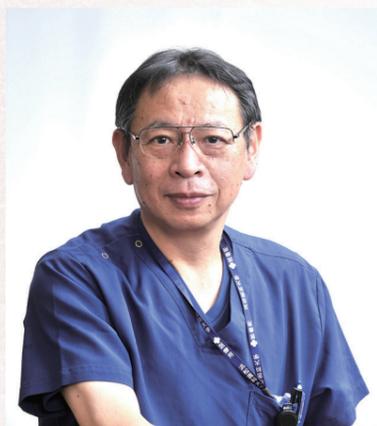
私の生き方は、整形外科のポリシー「困難な症例を進んでおこなうべし(K)、ことわるべからず(K)、最後まで最善をつくせ(S)、感謝の気持ちを忘れるな(K)、いつも笑顔と笑いを大切に(I)」というKKSIIに集約されます。17年間、浜松医大の皆様と夢を追えたことに心から感謝し、今後も恩返しできるような挑戦を続けたいと思います。本当にありがとうございました。



基礎看護学講座 教授
永田 年

29年間お世話になりました

1997年9月から現在まで約29年間、本学でお世話になりました。はじめの8年7ヶ月は、小出幸夫教授のもとで医学科の微生物学講座に助教として在籍し、主にリステリアや結核菌などの細胞内寄生細菌に対する細胞性免疫応答に関して研究に従事しました。当時、共に研究をした多くの大学院生が皆、現在臨床・研究の第一線で活躍されておりうれしく思っています。その後の20年は看護学科の基礎看護学講座に在籍しました。看護学科では研究のほか、教育や大学運営に積極的に取り組んできました。教育では、自分の専門である微生物学のみならず多様な専門基礎科目を担当してきました。また長期にわたり看護学科の評議員を拝命し、教育カリキュラムが順調に回るよう調整してきました。その間、大学院博士後期課程も設置され、看護学科の教育体制は大変充実してきていると自負しています。看護学科の教職員をはじめ、本学の多くの教職員の皆様には本当にお世話になりました。心より感謝申し上げます。本学の教職員の皆様のますますのご発展、ご活躍を心より祈っております。



地域医療学講座(寄附講座) 特任教授
吉野 篤人

多くの方々に支えられて

私は浜松市三ヶ日町の出身です。大学卒業後に浜松へ戻り、1986年に第一外科で研修を開始し、県内外の病院において外科および救命救急センターでの診療に携わりました。1992年に本学へ戻った際、発足間もない救急部に配属されたことが、その後の進路を決定づけました。阪神・淡路大震災での医療活動を契機に、災害医療にも関わるようになりました。基礎研究では浦野哲盟先生をはじめ医生理学教室の皆様にお世話になりました。約5年間の浜松医療センター総合診療科での勤務を経て、2003年に大学へ復帰後は、青木克憲救急医学講座初代教授のもとで救急医療に従事しました。

2013年からは救急災害医学講座を担当し、救急車受入体制の充実や学生教育、ACLSやJATECなど救急医療標準化コースの導入と普及に取り組みました。東日本大震災後は、Jヴィレッジでの経験を通じ原子力災害医療にも携わり、2024年からは地域医療学講座に移り、地域の医療を応援する住民活動の支援に取り組んでまいりました。

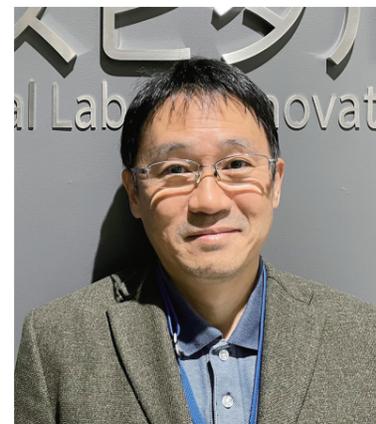
救急・災害医療という立場から、本当に多くの方々に支えていただきました。心より感謝申し上げます。



病理部 病院教授
馬場 聡

大変お世話になりました!!

浜松医大には1979年に入学(6期生)以来ずっとお世話になってまいりました。学生時代は準硬式野球部で野球三昧の日々を送り、顧問の伊藤善彦先生(数学)と宮本愛先生(解剖学)および先輩・後輩から沢山の刺激を頂戴しました。1985年に卒業後は病理学第二講座の白澤春之教授の下、室博之先生・前多松喜先生・三浦克敏先生らにご指導いただきました。アミロイドの研究では実験実習機器センターの藤江三千男技官・高橋利枝技官や電顕室の皆さんに大変お世話になりました。2003年から3年ほど袋井市民病院臨床病理科に赴任し、その経験が私に病理医としての矜持を与えました。2006年に本学病理部長に着任し、以来20年間担当させていただきました。年々増大・複雑化する病理業務に時間と労力の大半を費やすことになりましたが、病院執行部をはじめ、経営に関わる各部署のご理解のもとスタッフと機器設備の強化が成り、また、強い責任感とプロ意識をもって業務に取り組んでくれた病理スタッフの多大な努力があって、ここまで何とか凌いでこられました。今はただただ感謝しかありません。私と関わりのありましたすべての皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



臨床研究センター 薬剤主任
大村 知広

34年間ありがとうございました

製薬会社のMR職を経て1992年に薬剤師として入職し34年になります。当時は院外処方、薬剤師の病棟業務という概念はほとんど浸透しておらず、日夜、外来、入院患者さんの処方箋と格闘し、時間外は当直をするか研究をするという毎日でした。時代は変わり、医薬分業は当たり前になり、薬剤師は病棟上がり、当初十数名だった薬剤部は拡充しチーム医療などにも大きく貢献し発展しました。20年間在籍した薬剤部を離れ臨床研究センターに異動したのは14年前です。当センターは2000年以降少人数からスタートした「治験支援センター」「探索的臨床研究施設」が始まりで、現在、臨床研究センターと名を変え、治験支援のみであった業務は研究者主導臨床研究の研究立案サポート、CRC支援、品質管理、生物統計学的支援と総合的に臨床研究をサポートするセンターとなりました。

個人的にはその間大学ならではの教育、研究、学会にも携われたことは大きな財産かと思っています。今後は学内にあるNPO法人、光子量子医学推進機構の理事を務める企業・薬局で一薬剤師として地域医療に貢献していきたいと考えております。長期間にわたりお世話になった皆さまに感謝申し上げますとともに、浜松医科大学のますますの発展を祈念いたします。

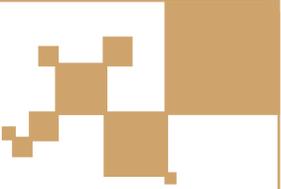
NEWS

保健管理センターの榎本講師が旭川医科大学第24回医学奨励賞 学術奨励賞を受賞しました

旭川医科大学医学奨励賞は、旭川医科大学創立20周年(1999年)を記念して、旭川医科大学医学部医学科同窓会により設立された賞です。母校を含む大学内外で活躍する同窓会会員の医学研究および医療活動を奨励・支援することを目的としており、顕著な研究業績を挙げた研究者を対象とする「学術奨励賞」と、医療界で広く社会的に活躍する会員を対象とする「特別奨励賞」の2種類があります。榎本講師は、学術奨励賞の受賞者として選出されました。
受賞課題
間質性肺疾患の病態解明、予後因子の解析及び新規治療開発を目指した包括的研究



New Staff Introduction



薬理学講座 教授
大久保 洋平

【専門分野】 薬理学・神経科学

2025年8月1日付けで薬理学講座教授を拝命いたしました。東京大学理学部を卒業後、同大学院医学系研究科細胞分子薬理学講座(飯野正光教授)のもとで、大学院生そして教員として、研究と教育のイロハを学ばせていただきました。その後、順天堂大学医学部薬理学講座において研鑽を積んでまいりました。

これまで一貫して、蛍光イメージング技術の開発とその応用に取り組んでまいりました。特に、インタクティブな脳組織を対象とした高解像度観察にこだわり、新規蛍光プローブと顕微鏡の開発を両輪として、これまで見えなかった分子ダイナミクスとその制御機構の解明を目指してまいりました。今後は、新たに開発した1分子蛍光イメージング技術を軸に、学内共同研究にも積極的に参画し、医学・生命科学の発展に資する研究を推進していきたいと考えております。

「光で医学を切り拓く」ことを目標に、本学の恵まれた研究・教育環境のもと、微力ながら本学のさらなる発展に貢献してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



微生物学・免疫学講座 教授
岩谷 靖雅

【専門分野】 感染症学・免疫学

2025年9月1日付けで微生物学・免疫学講座の教授を拝命しました。焼津市で生まれ育ち、静岡県立大学薬学部を卒業後、京都大学大学院医学研究科で博士号を取得しました。山梨大学医学部、米国国立衛生研究所(NIH)、国立感染症研究所、名古屋大学大学院医学系研究科、国立病院機構名古屋医療センターにて研究・教育に従事してまいりました。長年、HIV・AIDSを中心としたウイルス感染症学研究、特に、「生体防御因子、抗ウイルス薬と薬剤耐性の分子機序の解明」をテーマに研究を進めてきました。コロナ禍では、パンデミック初期よりCOVID-19検査体制の構築・運営を主導するとともに、COVID-19ワクチンの臨床開発や新規モダリティ治療薬開発にも力を注いできました。

環境変化や国際交流が盛んになるにつれ、感染症分野の問題は刻々と変化しており、こうした問題にも柔軟に対応できる医療従事者の研究・教育に尽力したいと思っています。さらに、感染症には国境がないため、地域はもちろん、国際社会にも目を向ける人材育成に貢献できれば幸甚です。また、私が生まれ育った静岡県が、豊かで幸せになるような社会活動にも貢献するように努めてまいります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

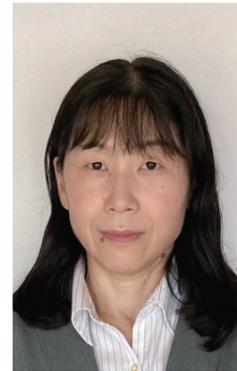


先端医療情報学講座(寄附講座) 特任教授
藤本 晃司

【専門分野】 画像診断学・医用画像AI・大規模言語モデル

2025年10月1日付けで先端医療情報学講座の特任教授を拝命いたしました。私は、2000年に京都大学を卒業後、放射線診断科に入局し、京都大学医学部附属病院、日本赤十字社和歌山医療センター、福井赤十字病院にて画像診断学の基礎を学びました。学位を取得後、京都大学の教員として企業との共同研究を含め、さまざまな画像解析研究や院内PACSシステムの維持・管理に携わってきました。近年では、大規模言語モデルを対象とした研究に取り組んでいます。

この度、静岡県からのご寄附により、医療DX人材育成による県内医療機関の勤務環境改善を目的として、新たに本講座が開設されました。2040年に向けて、医療を含む各分野における人材不足が大きな課題となることが見込まれていますが、本講座では静岡県内医療機関に向けた医療DX相談窓口および医療DX人材育成講座を通じて本課題に取り組んでいきます。また、浜松医科大学においては「電子カルテ情報共有サービス」、ならびにアマゾンウェブサービスジャパンとの包括連携協定をもとにした、医療データ活用基盤の構築、生成AIの活用についても取り組んでいきたいと考えております。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



光医学総合研究所
バイオフィotonicsイノベーション
寄附講座 特任教授
大前 悦子

【専門分野】 生体医用光学

2025年10月1日付けでバイオフィotonicsイノベーション寄附講座の特任教授を拝命いたしました。本講座は浜松ホトニクス株式会社の寄附により設立されたもので、私は同社中央研究所に所属しつつ、クロスアポイントメント制度により本学で教育・研究活動に従事させていただくこととなりました。

磐田市出身で、東京理科大学卒業後、同社に入社し、近赤外時間分解分光法を用いた生体内物質の非侵襲定量計測の実証研究および本技術の応用研究に取り組んでまいりました。近赤外時間分解分光法とは、近赤外光を生体組織に照射し、組織内を伝播する光の時間応答を解析することで、ヘモグロビン量などの物質濃度を非侵襲的に推定できる技術です。新潟大学で博士号を取得し、これまで浜松医科大学内のさまざまな講座の医師や研究者の皆様と共同研究を重ね、多くのご指導をいただきながら、光技術を通じて医療分野への貢献を目指してまいりました。

今後も、先生方のご指導を賜りながら、医学・生命科学と光工学の融合による新たな研究に微力ながら尽力してまいります。至らぬ点多々あるかと存じますが、何卒ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



長寿運動器疾患教育研究講座
(寄附講座) 特任准教授
吉田 剛

【専門分野】 整形外科・脊椎外科・脊髄機能診断学

2025年9月1日付けで長寿運動器疾患教育研究講座の特任准教授を拝命しました。1998年に浜松医科大学を卒業後、名古屋第二赤十字病院、岡崎市民病院、江南厚生病院、浜松医療センターで脊椎外科を専門として勤務してまいりました。2015～2016年にはフランスボルドー大学脊椎外科での留学を経て、当院整形外科教室で脊椎外科の臨床研究と診療に従事してまいりました。

日本の高齢者に対する整形外科的疾患は増え続けておりますが、医療財政、人的資源は限られており、その中で最大限の医療効率を得ることは至難の業であります。当講座では、医療効率やコストだけに捕らわれない、患者さんの満足度の高い治療・予防法を構築したいと考えています。運動器疾患の基礎研究を柱として、高齢者健康寿命延伸に寄与するよう、また地方自治体ともタイアップし、浜松市を中心とした静岡県全体の地域医療に貢献できるように邁進してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻をいただけますようお願いいたします。



生活習慣関連疾患重症化予防
医学講座(寄附講座) 特任准教授
岩倉 考政

【専門分野】 腎臓内科学・透析医学

2025年8月1日付けで生活習慣関連疾患重症化予防医学講座の特任准教授を拝命いたしました。私は2005年に本学を卒業後、腎臓内科医として急性腎障害や慢性腎臓病、透析療法の診療に携わってまいりました。2011年から急性腎障害の研究を開始し、博士号取得後にはドイツのルドヴィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘンに留学し、腎障害後の腎再生メカニズムに関する基礎研究に取り組みました。帰国後は、2020年に本院救急部の診療助教を務めた後、腎臓内科にて臨床に従事しながら、DPP-4阻害薬やSGLT2阻害薬などの腎保護作用に関するDrug-repositioning研究、腎生検の安全性評価、ネフローゼ症候群に関連する臨床研究などを進めてまいりました。

本講座は、静岡市からのご寄附により設立された寄附講座であり、地域における生活習慣病の重症化予防と生活習慣改善を目指す新たな講座です。これまで培ってきた臨床・研究経験を生かし、臨床と研究をつなぐ視点をさらに発展させ、地域医療へ貢献できる成果を創出していきたいと考えております。微力ながら尽力してまいりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

New Staff Introduction



光医学総合研究所
バイオフィotonicsイノベーション
寄附講座 特任准教授
鈴木 真澄

【専門分野】光技術・分子生物学

2025年10月1日付けで、バイオフィotonicsイノベーション寄附講座特任准教授を拝命いたしました。本講座においては、浜松ホトニクス株式会社とのクロスアポイントメントとして着任しております。私は2006年に立命館大学理工学部を卒業し、2008年に同大学大学院理工学研究科修士課程を修了後、浜松ホトニクス株式会社に入社いたしました。同社では光技術を基盤とした抗がん剤の製剤技術およびイメージング研究に15年間従事し、2024年からは企画部において研究戦略立案に携わってまいりました。

本講座では、これまで培ってきた光デバイスおよび関連技術の知見を本学の活動と橋渡しすることで、本学が取り組む研究テーマのさらなる発展を支え、新たな計測・診断技術や治療応用の可能性を切り拓く一助となれるよう尽力してまいります。皆さまとの出会いと対話を何より大切にしながら、本学に貢献していきたいと考えております。微力ではございますが、何卒ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

主催学会・シンポジウム

2025年8月1日～12月31日

第72回 日本ウイルス学会学術集会

次世代創造医工情報教育センター 特任教授 鈴木 哲朗
微生物学・免疫学講座 教授 岩谷 靖雅

2025年10月28日(火)～30日(木)、第72回日本ウイルス学会学術集会(プログラム委員長:小杉伊三夫 前再生・感染病理学講座准教授、事務局長:岩谷靖雅 微生物学・免疫学講座教授)をアクトシティ浜松にて開催しました。本学術集会は、ウイルス分類に基づく一般演題(口頭・ポスター)に加え、ウイルス種横断的なシンポジウムやワークショップ、招待講演、さらに若手研究者による独自企画で構成され、多面的な議論の場となりました。

シンポジウムでは、基礎ウイルス学の最前線に加え、国際的に活躍する若手研究者を招いたセッションや、遺伝子細胞治療学会、予防接種推進専門協議会など関連領域との合同企画を実施し、ウイルス学研究

の広がりと社会的意義が示されました。招待講演では、米国NIH所属のAlex Compton博士が連邦政府機関閉鎖の影響により来日できなかったものの、RNAウイルス研究の第一人者であるRalf Bartenschlager博士(Heidelberg大学)および細胞生物学分野を牽引する中西真博士(東京大学)にご講演いただき、最新の知見を共有する場が実現しました。

多様な分野・世代の研究者が交流した本学術集会在、今回のテーマ「新たな発想と連携へ」に繋がる、新たな挑戦や共同研究の芽を育む契機となることを期待しています。



第84回 日本公衆衛生学会総会を開催して

健康社会医学講座 教授 尾島 俊之
准教授 明神 大也

2025年10月29日(水)～31日(金)に、健康社会医学講座 尾島俊之学会長のもと、静岡市のグランシップにて第84回日本公衆衛生学会総会を開催いたしました。学会史上初の静岡県開催となり、テーマは「フェーズフリーの地域づくりと健康危機管理」として、平時の物や仕組みが危機時にも垣根なく役立つという概念を軸に、地震・風水害や新興感染症など次の健康危機への備えと、健康寿命を支える地域づくりの両立を目指して企画しました。

巨大災害や新時代の感染症危機管理、外国人へのリスクコミュニケーションなどのシンポジウムに加え、UHCと公平性、サイバーセキュリティ、地域包括ケアなどのグループワーク、一般演題(口演・ポスター)、

ランチョンセミナーなどを通じて活発な議論が行われました。厚生労働行政の現状・課題に関する講演やシンポジウムも開催され、行政・研究・現場の連携を再確認するところとなりました。

会期後はオンデマンド配信も行われており、例年4,000～4,500人規模のところ、今回は参加登録が5,500人を超え、盛会裏に終了しました。本学会総会の開催にあたり、ご尽力・ご協力いただきました関係各位に、心より厚く御礼申し上げます。



PRIZE WINNERS 学会賞等受賞

2025年8月1日～12月31日

賞の名称	受賞年月日	受賞者	受賞内容(研究題目)
第62回日本消化器免疫学会総会 奨励賞	2025年8月1日	大学院医学系研究科(博士課程)1年内科学第一講座 武部 友寛	潰瘍性大腸炎における腹腔内リンパ節腫大の意義
第16回日本炎症性腸疾患学会学術集会 優秀ポスター賞	2025年8月23日	医学部医学科5年 尾藤 滉基	尋常性乾癬に対する抗IL-17A抗体製剤治療が潰瘍性大腸炎発症の契機になったと考えられる1例
第63回全国大学保健管理研究集会 優秀演題賞	2025年9月11日	保健管理センター 保健師 内藤 由美	大学および附属病院職員における、原因別に有効な職場復帰支援対策に関する検討
生体医工学シンポジウム2025 ベストレビューワーアワード	2025年9月13日	光医学総合研究所 量子技術開発部門 生体計測工学分野 教授 大川 晋平	日本生体医工学会主催の「生体医工学シンポジウム2025」において優秀な査読者として表彰
生体医工学シンポジウム2025 ベストレビューワーアワード	2025年9月13日	光医学総合研究所 先端研究支援部門 先進機器共用推進部 機器・技術開発技術専門職員 村松 歩	日本生体医工学会主催の「生体医工学シンポジウム2025」において優秀な査読者として表彰
日本心臓血管麻酔学会 第2回Cardiovascular Anesthesia 最優秀賞	2025年9月20日	集中治療部 診療助教 鈴木 祐二	血漿フィブリノゲン値と誘電血液凝固分析の複合評価に基づく群分けと術後出血層別化解析:単施設後向き観察調査
第87回日本血液学会学術集会 優秀ポスター賞	2025年10月12日	病理部 副臨床検査技師長 山中 勝正	血清プレセプシン濃度は骨髄における血球貪食作用を反映する
日本癌治療学会 第25回研究奨励賞	2025年10月15日	泌尿器科 助教 松下 雄登	Comparative assessment of disease recurrence after transurethral resection of non-muscle-invasive bladder cancer with and without a photodynamic diagnosis using 5-aminolevulinic acid: a propensity score-matching analysis
FUSE-ON CHALLENGE 2025 NEDO賞	2025年10月17日	生殖周産期医学講座(寄附講座) 特任講師 宗 修平	新生児の呼吸モニタリングシステムの開発 -赤ちゃんの急変を迅速に検知するためのアプローチ-
日本胸部外科学会 General Thoracic and Cardiovascular Surgery誌 Best Reviewer Award (2025)	2025年10月24日	第二外科 特任助教 坊岡 英祐	日本胸部外科学会の機関誌「General Thoracic and Cardiovascular Surgery」の2024年の優秀な査読者として表彰
第72回日本ウイルス学会学術集会 優秀演題賞	2025年10月30日	微生物学・免疫学講座 助教 紺野 在	C型肝炎ウイルスは液-液相分離によりストレス顆粒タンパク質G3BP1を脂肪滴周囲に動員する
第25回中部臨床工学会 Best Presentation Award 優秀賞	2025年11月1日	医療機器管理部 臨床工学技士 菊川 結叶	脊椎側弯症手術において神経根直接刺激がMEPアラームへの迅速な介入につながりRescueとなった1例
2025年度日本臨床化学会 Young Investigator Award (YIA)	2025年11月8日	検査部 臨床検査技師 荻谷 健也	中長期変動を加味した生理的変動幅(Long-term Biological Variation: L-BV)の新規設定
第44回日本認知症学会学術集会 学会奨励賞(臨床研究部門)	2025年11月22日	光医学総合研究所 量子技術開発部門 バイオフィotonicsイノベーション寄附講座 特任准教授 寺田 達弘	早期アルツハイマー病における活性化ミクログリアとタウの進展様式は関連する
日本医療薬学会 2025年度Postdoctoral Award	2025年11月23日	薬剤部 薬剤師 長 邑花	骨格筋萎縮病態における敗血症増悪に関する研究
Thyroid Science Awards by Abbott Most Valuable Article Award	2025年11月27日	医学教育推進センター 特任講師 大場 健司	Influence of medication for lifestyle diseases on thyroid function during health examinations
令和7年度健やか親子21全国大会(母子保健・家族計画全国大会) 日本家族計画協会会長表彰	2025年11月28日	臨床看護学講座 教授 安田 孝子	多年にわたり母子保健・家族計画の普及指導に従事した功績による表彰
日本放射線腫瘍学会 第38回学術大会 2025年優秀教育発表奨励賞	2025年11月29日	放射線部 診療放射線技師 高松 達朗	マットレス沈み込みの位置変化に対する体表面画像誘導放射線システムの認識精度評価
画論33rd The Best Image 超音波 腹部部門 優秀賞	2025年12月14日	検査部 臨床検査技師 井上 良太	超音波が診断・治療経過観察に有用だった先天性胆道拡張症の一例
令和7年度浜松市地方創生SDGs取り組み表彰 ~一般部~ 優秀賞	2025年12月18日	生殖周産期医学講座(寄附講座)	赤ちゃんの急変を迅速に検知するモニタリングシステム

講座・研究室 紹介

Department・Laboratory Introduction



泌尿器科学講座

泌尿器科学講座の実験室で取り組んでいる泌尿器科疾患、特に腎臓癌、膀胱癌、および脊髄損傷後の排尿障害における病態メカニズムの解明と、新規バイオマーカーの探索をご紹介します。



1. 淡明型腎細胞癌(ccRCC)におけるFITM2:特徴的な脂肪液滴形成に関わるFITM2タンパク質が腫瘍部で発現上昇する中、FITM2がccRCCの予後予測因子として機能することを見出しました。
2. 脊髄損傷後の排尿筋括約筋協調不全(DSD)におけるKCC2の影響:脊髄損傷(SCI)後の排尿障害であるDSDの発生機序に、クロライドイオン輸送体KCC2の関与を見出しました。KCC2活性剤を投与したSCIマウスでは、DSDに伴う外尿道括約筋の異常な筋電図波形が改善傾向を示し、排尿制御に関わるOnuf核にKCC2の発現が確認されました。DSDの病態にKCC2発現低下が関与する可能性が示唆されます。
3. 上部尿路上皮癌と5mdC:DNAメチル化関連分子5mdCの役割を解析しています。腫瘍部で5mdC低下が認められる中、非腫瘍部の5mdC低発現が無増悪生存期間短縮と関連し、非腫瘍部のエピジェネティック変化がUTUCの再発・予後予測に有用であることを示しました。
4. 非筋層浸潤性膀胱癌におけるUBL3と再発予後:ユビキチン様タンパク質UBL3高発現は生存期間延長と関連する予後良好因子であることが、多変量解析で示されました。UBL3は再発リスクを予測する有用なバイオマーカーとして期待されます。これらの研究は、疾患の病態における分子レベルの理解を深め、予後予測や治療標的となり得る新規バイオマーカーの確立に貢献する可能性があります。我々は引き続き基礎・臨床ともに教室発の研究を続けてまいります。

生体機能イメージング分野

どんな研究をしていますか？

生体機能イメージング分野は、PET、MRI、光イメージングなどの先進的な画像計測技術を用いて、生体内で生じる機能変化や分子レベルの異常を“可視化”する研究を行っています。特に認知症を中心に、脳疾患、発達障害、精神疾患などを対象とし、病態の解明や早期診断、治療効果評価につながる新しいイメージング手法や解析技術の開発を目指しています。非侵襲的に脳機能を捉えることで、臨床応用を強く意識した研究を推進している点が特徴です。



集合写真(2026年1月)

他の講座にはない特徴を教えてください。

浜松ホトニクスおよび浜松光医学財団と連携し、動物モデルや細胞・組織レベルの基礎研究から臨床研究まで一貫して取り組める研究体制を構築しています。多モーダル画像解析、非侵襲光技術の開発、認知症・精神疾患の分子イメージング研究などを推進しており、医学・工学・薬学など多分野の知識を融合した研究が可能です。学生・大学院生は、学内外の共同研究や学会発表を通じて国際的な視野を養い、研究者や医工連携を担う人材として成長できる環境が整っています。



研究室にて使用できる研究モダリティ

輝く 浜松医大の 学生たち

~今、活躍する学生を紹介します~



2025年12月1日に行われた医学部学生表彰式で、課外活動、その他活動(研究活動等)において、特に顕著な成績を収めた学生・団体に対し、学長から表彰状を授与しました。

課外活動における表彰

久保田 真央(医学部医学科6年)

IFMSA-Japan代表として、日本の医学生への国際的な視野を広げる活動を推進しました。全国でイベントを開催し、組織の活性化と認知度向上に貢献しました。国際交流や学びの機会を創出し、グローバル医療人材の育成に寄与しました。※IFMSAは1951年にヨーロッパで設立され、WHO(世界保健機構)、WMA(世界医師会)をはじめとする国際機関と公式な関係を結んでいる、唯一の学生団体。2025年3月時点で130以上の国と地域が加盟し、130万人以上の学生が参加しています。

comment

この度は過分な賞をいただき、大変光栄です。私は国際医学生連盟 日本(IFMSA-Japan)という、社会貢献や国際交流を目的とした学生団体で活動してきました。日本各地や世界中の医学生と交流し、多様な視点に触れた経験はかけがえのない財産です。自身の情熱を注いできた活動がこのように形で評価され、深く感謝しております。また、本活動は、共に活動する500人近い仲間の存在があってこそ成り立っています。今後とも温かいご支援をいただければ幸いです。



課外活動における表彰

硬式庭球部

直近の3年間で、男女ともに下記の通り優れた成績を収めました。

【男子部】

- ・東海医歯薬テニス大会(団体戦) 2022~2024年度 優勝
- ・西日本医科学生総合体育大会(団体戦) 2025年度 準優勝

【女子部】

- ・東海医歯薬テニス大会(団体戦) 2022・2024年度 優勝
- 2023年度 第3位
- ・西日本コメディカル 2023年度 第3位
- 硬式テニス大会(団体戦) 2024年度 準優勝

comment 医学部医学科3年 二ツ橋 和 医学部医学科2年 永田 愛唯

この度は、学生表彰をいただきありがとうございます。関係者の皆様へこの場をお借りして感謝申し上げます。多くの大会でテニスという個人スポーツが、部全体として戦い抜く団体スポーツになる瞬間を感じました。今回の成績を残すまでに、たくさんの悔しい思いがありましたが、部一丸となり戦えたことは、大学生活における大きな財産になると思います。ご支援、ご声援くださる皆様への感謝の気持ちを忘れず、真に「応援される硬式テニス部」を目指して今後も活動していきたいと思っております。

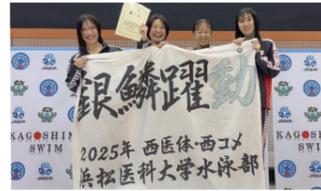


課外活動における表彰

星野 允里・山田 蘭世・石塚 心那・尾上 夏野

下記の大会などで優秀な成績を残しました。

- ・西日本コメディカル学生水泳競技大会 女子 総合優勝
4×50mフリーリレー 優勝



comment 医学部看護学科3年 星野 允里 医学部看護学科4年 山田 蘭世
医学部看護学科3年 石塚 心那 医学部看護学科2年 尾上 夏野

私たち水泳部は、週2回程度の限られた練習時間の中で、互いに切磋琢磨しながら活動しています。2025年に開催された西日本コメディカル学生水泳競技大会では、看護学科女子選手4名のみ出場ながら、個人4種目、リレー3種目で表彰台に上り、女子総合優勝を果たしました。中でも4×50mフリーリレーでは、4人全員が最後まで諦めずに競技に臨み、優勝を収めました。この経験は、大学生活における大きな財産です。今後も支えてくださる皆様への感謝を胸に、練習に励んでまいります！



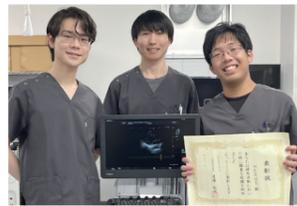
課外活動における表彰

HERUS (Hamamatsu ER UltraSound)

第17回日本ポイントオブケア超音波学会学術集会における「第3回Student POCUS League」で優勝し、池谷拓巳さんがMVPに選出され、団体・個人両方で高い評価を受けました。学内外での活動を通じて学生の技術向上に大きく貢献するとともに、医学教育における学生主体の取り組みの模範となっています。

comment 医学部医学科5年 池谷 拓巳

この度は学生表彰をいただき、誠にありがとうございます。私たちHERUSは、心エコーをはじめとしたエコーの技術や、救急医療に必要な知識・手技の習得を目的とし、学生主体で活動しているサークルです。週1回の勉強会では、部員同士が教え合いながら実践的な手技を磨き、学内セミナーの開催などを通じて学びを共有しています。こうした活動の成果として、大会での団体優勝および個人MVPという評価をいただきました。さらにBLS選手権やメディカルラリーにも参加し、エコーにとどまらない救急対応力の向上にも取り組んでいます。今後もHERUSの活動を通じて、学生主体の医学教育を発展させていきたいと考えています。最後に、日頃よりご支援くださる教職員の皆様へ心より感謝申し上げますとともに、引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。



その他活動(研究活動等)における表彰

坂野 有梨(医学部医学科6年)

本学で開発された電子顕微鏡技術「ナノスーツ-CLEM法」を用い、子どもに多いウイルス性皮膚感染症・水いぼの原因ウイルス(伝染性軟属腫ウイルス)を、通常の病理検査で使う皮膚組織標本上で高精度に可視化することに成功しました。角質層がウイルスからのバリアとして機能し、このバリアが破綻するとウイルスが皮膚内部へ侵入しやすくなることを視覚的に示し、感染メカニズムの視覚的証拠を世界で初めて提供しました。筆頭著者として国際誌「Immunity, Inflammation and Disease」に掲載され、静岡新聞でも紹介されて学生研究や基礎配属の意義を示しました。

comment

この度は学生表彰を賜りまして誠にありがとうございます。ご指導くださった河崎先生、ナノスーツ部の方々に心から感謝申し上げます。私は3年次の基礎配属をきっかけに研究活動に参加しました。本学の特色・強みである光医学研究に携わったことは他ならぬ貴重な経験となり、また、研究活動の楽しさ・奥深さも知ることができました。来年度からは本学を卒業し、医師として臨床現場での実践的な経験を積んでいきます。またいつか研究分野に還元できるよう、研鑽を積んでまいります。



その他活動(研究活動等)における表彰

高木 柊哉(医学部医学科3年)

東京保険医協会主催「医学生・若手医師論文コンクール」において、「医学生の特定診療科枠に対するイメージに基づく、学生視点からの診療科偏在対策の提案」という論文を投稿しました。本論文では、全国の医学部生に対して特定診療科枠に関するアンケートを実施し、医学部生の特定診療科枠に対するイメージをもとに診療科偏在対策の新しい手法を学生の視点から検討しました。本論文は、高く評価され、最優秀賞を受賞しました。

comment

この度は、栄誉ある賞をいただき誠にありがとうございます。本研究は、持続可能な診療科偏在対策を学生の視点から提案することを目的として行い、札幌にて開催された第83回日本公衆衛生学会総会での発表を経て、今回の論文コンクールでの受賞に至りました。筆頭著者として初めて取り組んだ研究の成果が評価されたことを大変うれしく思います。今後もこの経験を糧にして、研究活動により一層取り組みたいと思います。最後になりますが、本研究を指導して下さった法学教室の大磯義一郎先生に心より感謝申し上げます。



その他活動(研究活動等)における表彰

萩野 翔太(医学部医学科5年)

掛川市の母子保健データを活用し、妊婦の精神的状態と低出生体重児(LBW)出生との関連性を明らかにする研究を行いました。本研究では、母子健康手帳交付時の自記式質問票に含まれる「イライラ感」に着目し、それが出産結果に与える影響を統計的に検証し、妊婦のイライラ感がLBWと有意に関連することを示しました。本研究成果は、妊婦支援の現場での実用性を備え、社会的波及効果も大きいものであり、「東海公衆衛生雑誌」(査読付き学術誌)に筆頭著者として掲載されました。

comment

このたび論文採択による表彰をいただき、指導教員の先生方、共同研究者の森谷優人さん・大塚隼士さんのご支援に感謝します。論文執筆は、「まだ会ったことのない世界の誰かと問いや成果を分かち合い、少しずつ世界を変える営み」だと感じました。これを読んでいるあなた、それってかっこいいと思いませんか？現在は新たな論文も採択され、聖隷浜松病院との共同研究の論文文化も進めています。将来は基礎医学で日本を牽引する医師として社会に貢献したいです。皆さんも研究してみませんか？



令和7年度
**浜松医科大学
フォトコンテスト**
結果発表

浜松医科大学の魅力伝えるあらゆるジャンルの「浜松医科大学紹介作品」を募集したところ、35作品が集まりました。審査の結果、最優秀賞1作品、優秀賞2作品が決まりました。

📍 昨年度に引き続き、Instagramで「いいね!」による一般投票を実施しました!



公式Instagram

最優秀賞



今日もみんなで
医学部医学科 高橋 凜

優秀賞



未来を繋ぐ
はんだやまっぴー
医学部医学科卒業生
藤田 京子



天、かける
病院総務課
森下 慶子

ケニアにおける 国際サービスラーニング・プログラム (ISL)とは?



総合人間科学講座(英語)
特任講師
Michael Boyce



▲小学校の壁に描かれたライオンとともに



まず初めに、HUSM国際サービスラーニング・プログラム(ISLプログラム)に関する誤解について説明したいと思います。ケニアでの私たちの活動は、単なるスタディツアーやサファリトリップではありません。もちろんそうした要素はありますが、学生やボランティア医師がケニアで過ごす3週間は、ほぼ全てプログラムに関連したもので構成されています。ナイロビのスラム地区から地方の農村地域に至るまでの学校や病院、地域コミュニティといった多様な場所で、リプロダクティブヘルス(RH)教育やエコワークショップ、医療キャンプなどを行っています。



▲学生がオンラインコンテンツを用いてケニアの若者に性教育を行う様子

2021年のコロナ禍において、ISLプログラムはナイロビのスラム地区の小学校からの要請に応える形で発足し、少数の学生と医師によるRHに関するオンラインコンテンツの作成から始まりました。以降、コンテンツを改良しながらケニアの若者やボランティアグループへのオンラインクラスが重ねられ、2022年度にはISLプログラムの正式なコースとして開設されました。コロナ禍以降は現地での活動を開始し、昨年度のケニア訪問では10カ所の地域で13

回の医療キャンプを開催し、およそ1,400人の地域住民を診察しました。また、4つの小学校で約1,000人の子どもたちにRH教育を行いました。今年度はさらに規模を拡大し、14カ所でフィールドワークを行う予定です。これらのプログラムは地域住民の声や保健分野に携わる行政の意見を聴きながら、ボトムアップ方式で構築されています。



▲政府関係者との面談

ISLプログラムはケニアにおけるフィールドワーク(ISL-III)だけではありません。学生はまずケニアで活動するための知識とスキルを学ぶ講義(ISL-I)を修了し、それと並行してケニアの若者を対象としたRH教育・ライフプランニングに関するオンラインクラス(ISL-II)を実施します。ISLプログラムはエビデンスに基づく教育のフレームワークであり、全体を通して内省的な思考と変革(reflective transformation)が育まれるよう意図的に設計されています。日本での講義とケニアでのフィールドワークとともに、サービスを提供するだけでなく、そこから学ぶという、サービスラーニングの重要な要素を取り入れています。ケニアに住む人々とオンラインあるいは現地で関わるという体験をするこ

とで、学生の世界観は広がり、体験学習と変革に不可欠な当惑的ジレンマ(disorienting dilemma: 既存の意味枠組みを揺さぶり、自己の前提を再検討させる経験)をもたらします。これらの経験を強化、発展させていくのがプログラムの根幹となるリフレクションエクササイズであり、内省的な振り返りによって経験の価値や意味をより深く理解することにつながります。

参加学生とボランティアは、ISLプログラム全体を通して、国際的な経験を積み、資源が限られた環境での実践や、未知の困難な環境で働く自信を育みます。ISLプログラムは、大学における国際目標や国連のSDGsに取り組むだけでなく、自然災害などで資源が限られた状況での医療活動に対する意識を高め、変化し続ける世界で安心して働くことができる未来の医師を育成します。

ケニアにおけるこのプログラムおよび関連プロジェクトは、資金援助、技術支援、医療ボランティア、または医療資源といった形での協力を常に必要としています。このプログラムを何らかの形で支援することにご関心のある方は、ぜひご連絡ください。



▲ミゴリ郡公衆衛生局長メイブル・チャンズ氏と今後の活動、交流、研究の計画策定

海のむこうで

Beyond the Sea

「赤」に染まるネブラスカで学んだ、 看護の情熱と実践のリアル



医学部看護学科4年
加茂 鈴桜七



▲ホストファミリー宅での夕食



▲ホストファミリーのアダムスさん(筆者:左から2番目)

異文化環境における看護の本質の再考

広大な空とどこまでも続く地平線が印象的なネブラスカ州で、2025年9月、私はネブラスカ大学医療センター(UNMC)における看護研修に参加しました。アメリカンフットボールの試合日には、街全体が地元チーム「ハスカーズ」の赤に染まり、人々が一体となって応援します。こうした地域に根ざした文化の力強さに触れる中で、文化が人々の価値観や日常の行動を支えていることを実感しました。学生や地域住民が自然に交流する姿を目にする機会も多く、医療や看護が地域社会の一部として存在していることを強く感じました。異文化の中で生活し学ぶ経験は、看護を専門職として捉え直す貴重な機会となりました。



▲アメリカンフットボールの試合観戦

臨床実践能力を重視した UNMCの教育体制

UNMCで特に印象に残ったのは、看護教育における実践性の高さです。日本では基礎を段階的に学ぶ教育が中心ですが、UNMC

では早期から臨床現場を想定した学習が行われていました。CVカテーテルの挿入介助・管理やWOUND VAC(局所陰圧閉鎖療法)などの看護技術も、臨床状況を想定したシナリオ演習を通して学びます。手技の習得にとどまらず、患者の状態を踏まえた判断や、医師・他職種との連携を含めたチーム医療の視点が重視されていました。こうした学習を通じて、看護師に求められる役割の広さと責任の大きさを具体的に理解することができました。

高度シミュレーション演習を通じた 専門職としての責任感

最新のシミュレーション施設では、病棟や外来が実際の臨床に近い形で再現されており、呼吸音や心音、患者の反応まで体験することができます。安全が確保された環境でありながら、現場に近い緊張感の中で学ぶことで、判断の一つひとつが患者の安全と質の高い看護に直結していることを強く意識するようになりました。状況に応じて優先順位を考え、限られた時間の中で適切な行動を選択する経験は、知識を実践につなげる重要性を学ぶ機会となりました。この経験は、看護職としての責任と専門性を深く理解する契機となりました。

という視点を、実践を通して身につけていました。多くの学生が入学前に看護助手(CNA)として現場経験を積んでおり、授業中の発言やディスカッションからは、主体的な学びと高い専門意識が感じられました。看護を将来の職業として明確に意識した学習環境が、教育の質をさらに高めているように思われました。



▲UNMCのシミュレーションセンター

国際的な視野を持った 看護の発展に向けて

今回の研修を通して、日本の丁寧な基礎教育の価値を再認識すると同時に、アメリカの実践力を重視する教育から多くの学びを得ることができました。両国の教育の特長を比較することで、看護教育の多様な在り方について理解を深めることができたと感じています。このような貴重な機会をご提供くださった関係者の方々に心より感謝申し上げます。本研修で得られた経験を今後の学びや看護実践、さらには教育活動にも生かし、国際的な視野を持った看護の発展に貢献していきたいと考えています。

地域社会と歩む看護の姿

UNMCの看護教育では、地域社会との連携も大切にされています。学生たちはホームレス支援や健康フェアなどの活動に積極的に参加し、「病気だけでなく、その人の生活背景を見る」と

9月

9月9日(火)～10日(水)
共用試験医学系CBT

医学科4年次生に、共用試験医学系CBTを実施しました。共用試験医学系CBTは、臨床実習開始前までに修得しておくべき医学的知識を評価する試験です。

9月15日(月)

第6回ブラック・ジャックセミナー

本学多目的ホールにて開催し、静岡県内の高校生34名、保護者8名、高校教師1名が参加しました。6グループに分かれて、①救命救急・AED体験、②手術縫合体験、③最新医療機器体験(超音波メス)、④自動縫合器・吻合器体験、⑤内視鏡手術トレーニング体験、⑥竹内裕也教授・岡本一真教授との面談を行いました。



9月22日(月) FD講演会

米国ロチェスター大学より Jefferson Svengsouk先生を講師にお招きし、「Music in Medicine: Improving the Healthcare Experience of Patients and Caregivers.」と題したFD講演会を開催しました。教職員・学生合わせて16名が参加しました。



9月24日(水)～26日(金)
第22回慶北一浜松合同
医学シンポジウム

今年度は韓国・大邱市の慶北大学校医科大学および看護大学にて開催しました。24日には歓迎レセプションが行われ、翌25日には医学および看護のシンポジウムが同時開催されました。最終日の26日には、世界遺産である仏国寺などを訪問しました。両大学は今後も医学・看護学のさらなる発展を目指し、学術・研究・文化交流を一層推進してまいります。



9月30日(火)

大学院医学系研究科(博士課程)学位記授与式

博士課程修了生4名、論文博士3名、計7名に学位記を授与しました。



10月

10月1日(水)
大学院
医学系研究科(博士課程)入学式

中国4名、バングラデシュ1名、パキスタン1名
合計6名の留学生が入学しました。



10月3日(金) 第11回
MiRAI-WS(未来ワークショップ)

事務局若手職員の発案で実施している「MiRAI-WS」を開催し、若手職員を中心に14名が参加しました。Microsoft365の基礎知識や活用事例の紹介のほか、担当業務で変えてみたいこと・やってみてみたいことをテーマにグループに分かれて意見交換を行いました。

10月6日(月) 地震防災訓練に伴う事前講習会

災害時の初期診療や情報伝達などについて事前講習会を行いました。

10月16日(木)・11月11日(火)・12月16日(火)・1月19日(月)・2月13日(金)
English Café

国際化推進の一環として、留学生や学生、教職員が集まり、英会話を楽しみながら交流を深めました。



10月25日(土)
共用試験医学系OSCE

医学科4年次生に、客観的臨床能力試験(OSCE)を実施しました。試験は実技で行われ、技能と態度が評価されます。



10月29日(水)
第7回
留学生研究報告会・
ウェルカムイベント

大学院3年次の留学生10名による研究報告会を開催しました。その後、4月・10月入学8名の新入留学生歓迎を目的としたウェルカムイベントを開催し、合わせて約60名が参加しました。



10月29日(水)
安全衛生講演会・
学校保健講演会

ヨガ安全指導員およびピンクリボンアドバイザー中級資格をお持ちで、フィットネスインストラクターのご経験を有する山崎久乃先生を講師にお迎えし、「運動で保つ心と体の健康～腰痛・肩こり・不眠・生理痛を和らげる呼吸と運動～」と題した講演会を開催しました。



11月

11月1日(土) 第47回公開講座

「いつまでも自分の足で歩くために」をテーマに、整形外科 古橋弘基講師による「赤ちゃんから大人まで股関節の診療と最新の人工関節」、第二外科診療科群 犬塚和徳講師による「足の血管病について」の講演を行い、県内外から143名が受講しました。



11月1日(土)～2日(日) 医大祭「Turn New」

医大祭実行委員会主催により、「Turn New」をテーマに第49回医大祭を開催しました。講義実習棟前ステージや体育館では、学生による発表やライブの他、お笑い芸人「ラバーガール」のお二人をお招きした、スペシャルお笑いライブを行いました。特別講演では、梅村和夫理事が「挑戦する大学～変化の時代を生き抜く教育と研究～」と題して講演を行いました。



11月9日(日)
地震防災訓練
および消防訓練

※p4に記事を掲載しています。

11月10日(月)
静岡大学浜松キャンパス
3部局と部局間包括協定を
締結

※p8に記事を掲載しています。

11月13日(木) 動物慰霊祭

約70名の教職員が参列し、動物慰霊塔前で、本学における医学の研究と教育のために実験に供された数多くの諸動物に対し、感謝の意を表するとともに、その霊の安らかなることを祈念しました。



11月14日(金)
外国人留学生実地研修旅行

今年は県内の仏閣や史跡、名所を巡りました。外国人留学生が日本の文化、歴史、風土、産業などの見聞を広め、日本をより深く理解してもらうとともに、外国人留学生と教職員の相互理解や親睦を深める機会となりました。



11月15日(土)～16日(日)
第6回学内研究交流会

異なる部署に所属する学内研究者間の交流促進による研究活動の活性化を目的とした学内研究交流会を開催し、41名の参加者が集まり、分野を超えた熱い議論を行いました。



11月17日(月)
永年勤続者表彰式

教職員22名が勤続20年の永年勤続者表彰を受け、学長から表彰状ならびに記念品を贈呈しました。

11月21日(金)
シミックホールディングスと
包括連携協定を締結

※p8に記事を掲載しています。

11月24日(月) 静岡大学との共催で
防災シンポジウムを開催

静岡大学浜松キャンパスにおいて、静岡大学防災総合センターと本学地域創成防災支援人材教育センターの共催によるシンポジウム「レジリエント社会の構築 南海トラフ巨大地震への備え」を開催しました。

12月

12月1日(月)
学生表彰

課外活動、その他活動(研究活動等)において、特に顕著な成績を収めた学生・団体に対し、学長から表彰状を授与しました。

※p16-18に記事を掲載しています。

12月2日(火)
夜間想定消防訓練

※p4に記事を掲載しています。

12月2日(火) クリスマス
イルミネーション点灯式

附属病院小児科の子どもたちによりクリスマスイルミネーションが点灯されました。点灯式では病棟廊下の一部を消灯し、入院中の子どもたちとご家族、病院スタッフが一緒に点灯のカウントダウンをしました。



12月12日(金)
静岡市・静岡大学
浜松キャンパス3部局と
「医工情官・地域連携協定」を
締結

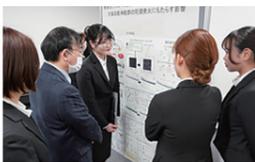
※p8に記事を掲載しています。

12月16日(火)
浜松市・静岡大学
浜松キャンパス3部局と
包括連携協定を締結

※p8に記事を掲載しています。

12月23日(火) 看護学科卒業研究発表会

看護学科4年次生の卒業研究発表会を開催しました。口頭発表とポスター発表を行い、看護学科の教員による投票の結果、最優秀賞1題、優秀賞3題が選ばれ、表彰式にて表彰状が授与されました。



1月

1月5日(月)
新年交礼会

仕事始めにあたり新年交礼会を行いました。渡邊学長から「今年は、干支では午(うま)年にあたります。午年は前進や飛躍を象徴する年と言われています。浜松医科大学、そして本学で働く皆様一人ひとりにとって、本年が新たな飛躍の年となり、実り多く、幸多き一年となりますことを心より祈念いたします。」と挨拶がありました。



1月7日(水) Student Doctor
称号付与式

医学科4年次生108名にスチューデント・ドクター(Student Doctor:SD)の称号を付与しました。「Student Doctor」は、医学科4年次までに所定の単位を修得し、CBTと臨床実習前OSCEに合格した学生に与える称号です。称号を付与された学生は、今後、教員や医師などの指導の下、臨床実習を行います。

1月9日(金) 第5回卒業生リレー講演会

「地方大学と政策目的大学のはざまへ～脳神経外科におけるチーム作りから基礎・臨床まで～」と題して、産業医科大学の山本 淳孝 教授(医学科17期生)にご講演いただきました。



1月14日(水)
管弦楽団に
よるコンサート

本学学生管弦楽団によるコンサートを開催し、入院患者さんやご家族が集まりました。



1月26日(月) 浜医やらまいかピッチ2025

アントレプレナーシップ教育の一環でアイデアピッチコンテストを開催しました。今回は学生および教職員より13名がエントリーし、医療・看護・ヘルスケア分野に関する課題や、本学の環境改善に関するアイデアが発表されました。

2月

1月31日(土)～2月1日(日)
入学者選抜試験

令和8年度学校推薦型選抜、海外教育プログラム特別入試、社会人入試を実施しました。

2月25日(水)～26日(木)
入学者選抜試験

令和8年度浜松医科大学入学者選抜試験(前期日程)を実施しました。



◀金閣寺と

International Student Introduction

留学生の紹介

A Journey of Learning, Research, and Growth 学び、研究と成長の旅

大学院医学系研究科光医学共同専攻(博士後期課程)2年
生体計測学分野

出身国



パキスタン

FAHEEM Muhammad

What and where did you study before coming to Japan?

Before coming to Japan, I completed my academic journey at COMSATS University Islamabad, one of the top universities in Pakistan, where I pursued both my bachelor's and master's degrees in physics. During these years, I developed a strong foundation in core physics subjects and did research in the field of photonics, a field that ultimately inspired my current research direction with the combination of medicine. During my master's degree, I became deeply involved in photonics research, particularly in areas related to light-matter interactions and optical measurement techniques. My time at COMSATS also enabled me to participate in laboratory work, seminars, and collaborative discussions, all of which enriched my academic perspective.

日本に来るまではどこでどんな勉強をしていましたか?

日本に来る前、パキスタン有数の大学の一つであるコムサツツ大学イスラマバード校で学び、物理学の学士号と修士号を取得しました。コムサツツ大学で過ごした数年間に、物理学の基礎分野において強固な基盤を築き、フォトニクス分野の研究に従事しました。この分野は最終的に医学との融合を通じて、私の現在の研究方向性に影響を与えました。修士課程では、フォトニクス研究に深く携わり、特に光と物質の相互作用および光学測定技術に関連する分野に注力しました。在学中は、実験作業やセミナー、共同ディスカッションなどへ参加する機会に恵まれ、これらすべてが私の学術的視野を広げることに繋がりました。



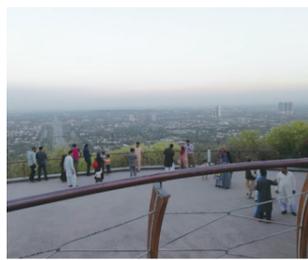
▲コムサツツ大学の図書館

How is your country (or city) like? How is the education circumstances like in your country?

I come from Islamabad, the capital of Pakistan. It is known for its natural beauty, peaceful environment, and organized infrastructure. The city is surrounded by the Margalla Hills, which give it a calm and scenic atmosphere. Islamabad is considered one of the safest and most well-planned cities in the country. People from many regions of Pakistan live there, making it a vibrant mix of traditions, languages, and lifestyles. Regarding education, Pakistan cities like Islamabad offers good educational opportunities. Many reputable universities, research centres, and colleges provide strong academic programs. Students receive solid theoretical knowledge, and the overall academic environment is improving every year. However, there are areas that still need improvement. One major challenge is the advancement of research laboratory. Despite these challenges, the education system continues to progress, and many students from Pakistan succeed internationally due to their strong academic foundation.

出身国(地域)はどんな様子ですか?教育事情は?

私はパキスタンの首都イスラマバードの出身です。イスラマバードは自然の美しさ、穏やかな環境、そして整備されたインフラで知られています。街は、マルガラ丘陵に囲まれた静かで風光明媚な雰囲気を感じ出し、国内で最も安全かつ計画的に整備された都市の一つとされています。パキスタンの各地から人々が集まり、伝統、言語、生活様式が入り混じり、活気に満ちています。教育に関しては、イスラマバードのような大都市では優れた教育を受けることができます。多くの名門大学、研究センター、カレッジで、優れた学術プログラムが提供されています。学生たちは確かな理論的知識を身につけ、学術環境全体が年々向上しています。しかしながら、まだ改善が必要な分野が依然として存在しています。大きな課題の一つは、研究施設の拡充です。こうした課題にもかかわらず、教育制度は発展を続けており、パキスタン出身の多くの学生が、強固な学術的基盤のおかげで国際的に成功を収めています。



▲マルガラ丘陵のダム・エ・コーから見たイスラマバードの街並み

Is there anything else you would like to share with us?

Yes, I would like to share that I am truly grateful for the opportunity to continue my academic and research journey in Japan. Living and studying here has been an inspiring experience. Japan is not only advanced in science and technology but is also admired for its discipline, cleanliness, and strong work ethics. These qualities create a very supportive and motivating environment for researchers and students. I feel especially fortunate to be at Hamamatsu University School of Medicine, which provides excellent research facilities and a collaborative learning environment with Shizuoka University. The guidance and support from faculty especially Professor Okawa Shinpei, as well as the international office staff, have been invaluable in helping me adapt to a new academic and cultural environment. Their assistance with administrative processes, academic guidance, and everyday matters makes it much easier for international students like me to focus on our research and studies.

その他何か伝えたいことはありますか?

日本で学術研究の道を歩み続けられる機会をいただけたことに心より感謝しています。ここで生活し、学ぶことは、素晴らしい経験です。日本は科学技術が先進的であるだけでなく、規律正しさ、清潔さ、そして強い労働倫理でも称賛されています。これらの特性は、研究者や学生にとって非常に支援的である環境を生み出しています。浜松医科大学に在籍できたことを特に幸運に感じています。同大学は優れた研究施設を提供し、静岡大学と連携した協働学習環境が整っています。大川晋平教授をはじめとする教職員の方々、そして国際化推進室スタッフのご指導とご支援は、私が新たな学術的・文化的環境に適応する上で計り知れない助けとなりました。事務手続き、学術的指導や日常的なことをサポートしていただければ、私のような留学生は研究や学業に専念しやすくなっています。

山岳・ワンダーフォーゲル部

Mountaining and Hiking Club

設立
1976年

活動日程
晴れの日

部員数
5名



医学部医学科5年
竹林 脩世

祖国の山に学ぶ

「天は我々を見放した!」
映画「八甲田山」に登場するこの言葉は、我々に自然というものがいかに大きな存在であるか、なぜ人間が自然に対して畏敬の念を持たなくてはならないのか、ということをお考えください。
我々、山岳・ワンダーフォーゲル部はそんな自然を相手にしている部活です。山に登るときに最も大切なことは、山に対して畏敬の念をもって接することだと思っています。八百万の神々というように、山は古来より信仰や畏怖の対象とされてきました。そんな山に登らせていただく、これは神様に触れる神聖な行為であるわけですが

ら、畏敬の念を持つことが最も大切であることがわかるでしょう。
山岳を含む我が国の大自然は、大和民族が2,700年にわたり受け継いできたものです。この大自然を次代に引き継ぐことは現代を生きる我々の責務なのではないでしょうか。そのためには、決して驕らず、相手を尊び、正直で潔白な真心を常に磨き続けることが必要です。そして祖国、祖先を敬い、これからの日本を次代へ導ける人間でありたいと考えています。
これからも自然に対して畏敬の念を忘れず、そして決して焦らずに真摯に山と向き合い続けていく所存です。

CLUB Introductions

サークル紹介

こちらからサークル紹介の動画をご覧いただけます! →
浜松医科大学紹介動画



管弦楽団

Orchestra

設立
1980年

部員数
62名

活動日程
週2回(木・土)練習



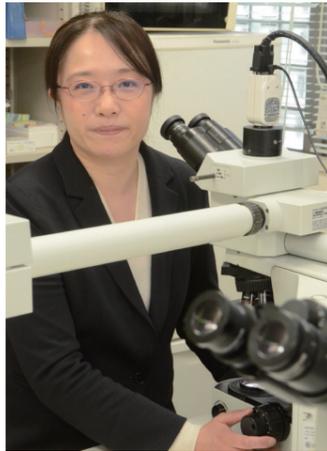
こんにちは!浜松医科大学管弦楽団(通称オケ部)です!

私たちは、毎年6月にアクトシティホールで行う定期演奏会を中心に、入学式・卒業式などの式典、夏冬の病院コンサート、医大祭など、さまざまな演奏活動を行っています。
活動は週2回と限られた時間ではありますが、クラシックからポップスまで、クオリティの高い演奏をお届けできるよう、日々練習を積み重ねています。大学から楽器を始める学生も半数近く在籍しており、個人練習や合奏に加えて、パート練習などの機会が充実している点も、オケ部の魅力の一つです。大所帯な部活動ではありますが、学年を問わず和気藹々と活動しており、部室は部員の憩いの場となっています。

また、運動部同様、春夏には全国の学生有志が集まるオーケストラ(医オケ)への参加もあり、全国の大学に友人がいる部員も多く、交流も盛んに行われています。
私たちの活動は、部員一人ひとりの練習はもちろんのこと、指揮者やトレーナー、顧問の先生方、ホールのスタッフの方々、病院のスタッフの皆様など、学内外の多くの方々のご協力によって成り立っています。日々、人とのつながりへの感謝を忘れず、これからも活動していきたいと考えています。
さて、この原稿が掲載されるのは3月号と伺っています。そろそろ定期演奏会に向けた練習も佳境に入ってくる頃です。ぜひ6月の定期演奏会にも足をお運びいただけますと幸いです。



医学部医学科3年
末次 くら



▲新潟大学医学部臨床病理学分野 医局集合写真(筆者:前列、右から4番目)



地域に根ざし、世界にはばたく医師を育てる

2001年卒、医学科22期生の大橋瑠子と申します。2024年3月より新潟大学医学部臨床病理学分野の教授を拝命し、教育・研究・若手病理医育成に取り組むとともに病理診断に従事しています。

学生時代は病理が苦手な中で、追試でも合格に至らず、術中迅速診断についてレポートを課されたことで病理医という極度の人手不足の職種を知りました。机上の勉強は苦手でも顕微鏡は好きだったので、「多くの人が行く科に進むよりも病理医が一人増えれば社会に大きく貢献できる」と考えたことが病理医を志したきっかけです。その後、臨床実習で恩師(当時聖隷浜松病院、現新潟県 立川総合病院 小林寛先生)と出会ったことも背中を押し、卒後は母校の第一病理に入学しました。2003年に地元新潟へ戻って以来、22年間新潟大学に勤務してきました。

学生の頃、浜松医科大学第二外科の中村達名誉教授など複数の先生から「新潟大学は病理診断のメッカだから、地元が新潟ならいつか一度は新潟大学の病理で学ぶとよい」と勧めていただいたことを今でもよく覚えています。一度のつもりが気づけば居座ってし

まいました。時折ふと自分が今その教室の主宰を務めていることに思い至り、歴史ある教室を預かる責任に身の引き締まる思いがします。思えば当時、浜松医大では教員と学生の距離感が近く、第一線で活躍され忙しい中でも多くの先生方が一学生や一研修医の声に耳を傾け、キャリアパスについて親身に助言くださいました。今の自分は果たして同じように教育に向き合っているだろうかと思ひ省みることしばしばです。

私の専門分野は腎癌を中心とする固形がんの病理診断です。形態学を基盤とする病理学に、次世代シーケンサーによる網羅的遺伝子解析やバイオインフォマティクスを融合させることで、より有用な病理診断手法の開発や、がんの発症・進行メカニズムの解明を目指して腎癌・大腸癌の国際多機関共同研究を進めています。その成果により、がんの国際病理分類であるWHO分類ならびに病理診断報告様式の国際ガイドラインであるThe International Collaboration on Cancer Reporting (ICCR) の腎癌部門委員に選出いただき、執筆を担当しました。研究成果が数年という比較的短期間で実臨床



▲教授就任祝賀会(2024年11月9日開催)の余興のオーケストラ演奏
新潟大病理は筆者を含む7名が演奏し、浜松医大関係者4名が演奏に参加くださいました。
学生時代はオーケストラ部でした。学会の懇親会や市民公開講座などで隙あらば演奏しています。

医学科22期生
(2001年3月卒業)
大橋 瑠子

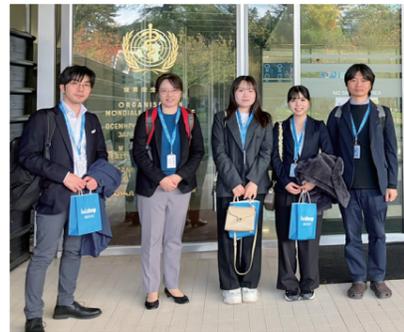


卒業生は 今



産業保健師として働く中で

看護学科26期生
(2024年3月卒業)
鈴木 まゆ



▲新潟大学では海外で病理の医学研究実習(基礎配属)を行っています。スイス・世界保健機関(WHO)訪問時の学生、若手教員らとの1枚。(筆者:左から2番目)

や医学教育に反映されるという貴重な機会に恵まれた経験は大きな励みとなっています。

日常診療で疑問や課題に直面した際、以前は「偉い先生が決めたことだから仕方ない」と諦めていました。しかし今は若手には、問題は諦めなくてもよいこと、むしろそこから研究課題へと昇華させ実行することが医療の発展につながることを、その分野の権威でなくとも若手にも医療の進歩に貢献するチャンスがあることを伝えるよう心がけています。こうして書いてみますと私自身が決して優等生ではない多様性の塊で、多くの先生方や友人に助けられ病理医として成長してきました。みんな違ってみんないい、の精神でこれからも人との縁を大切に、病理の立場から医療の質の向上と医学研究の発展に尽力してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

浜松医科大学のますますのご発展と皆さまのご健勝を祈念いたします。

こんにちは。2024年に看護学科を卒業した鈴木まゆと申します。卒業後、中部電力(株)に入社し、産業保健師として働いています。保健師として働き始めて2年目でこのような機会をいただけたことは大変恐れ多いのですが、現在の仕事を紹介させていただきます。

社内には50名程度の保健師が所属しており、中部地域の各県で働いています。私はその中で静岡エリアの従業員を担当する静岡健康管理室で働いています。同じく浜松医科大学看護学科卒業の先輩も数名いらっしゃり、いつもサポートをいただいています。また、それぞれ違う県で働いている保健師の同期もいて、定期的に集まっては近況報告をしています。

私は、産業保健業務として主に従業員の健康管理を行っています。具体的には、健康診断後の面談や健康相談において従業員の体調を確認したり、メンタル不調者への対応をしたりしています。不調者の中でも、特に

メンタルヘルス不調者への対応については悩むことが多いです。しかし、周りの先輩方がアドバイスをくださるので、日々学びながら対応をしています。不調者が新たに出たときや共有したい話題があるときなど、その事例の検討をする時間が毎週設けられており、いろいろなケースがある

のだな、といつも実感します。自分ももし同じようなケースに出会ったときに対応できるか不安は大きいですが、先輩方の実際の対応を見たり、聞いたりしながら学んでいます。また、社内では従業員の健康管理を経営的な視点で考える「健康経営」という考えのもと、いろいろな健康施策を行っています。入社早期から保健師による面談や健康教育を実施しており、将来の生活習慣病などの予防のために若年のうちから介入をしています。私自身も入社2年目という立場で他の同期と同様に健康教育を受けていますが、産業保健師という立場から同期と面談をする機会もあります。同期との面談のときは少し不思議な気持ちになりつつも、食事や運動に関するアドバイスをしています。

忙しく働く従業員の健康管理をするにあたっては、常に難しさを感じています。そのような中でも、自分たちの働きかけにより、従業員の健康に対する意識が変わったときには



▲看護学科卒業の保健師の先輩・後輩と食事

やりがいを感じます。以前、肥満傾向の従業員を対象に生活習慣予防のためのセミナーを開催しました。そのセミナーに参加した方と数か月後に面談をした際、「この前のセミナーで今のままじゃまずいと思って食事に気を付けるようにしたんだよ」と言っていただきました。現状だとまずいという気づきを得て実際に行動の変化があったと聞き、セミナーを開催した目的を達成したような気がして、やってよかったなと感じました。私たちの仕事はすぐに結果の出る仕事ではありませんが、長期的な視点でサポートをしていくことで、意識や行動の変化につながるようになっていきたいと思います。

企業で働く保健師として幅広い業務をこなしていく必要がありますが、産業保健師に求められるスキルを身につけるために自己研鑽を続け、成長していきたいと思っています。



▲保健指導をしている様子

浜松医科大学基金へご協力いただき、心よりお礼申し上げます。

教育・研究・診療および社会貢献活動を推進していくために募金活動を行っています。浜松医科大学基金を基に、安心して医学・看護学の教育・研究に打ち込める環境やさまざまな交流を行う機会を安定的に提供することで、将来性豊かな多くの若者を優れた医療人や研究者に育ててまいります。

寄附者ご芳名

2025年9月から2026年1月までに91件のご寄附をいただきました。
お名前の公表にご了承いただいた方を五十音順にご紹介いたします。
なお、本学職員については掲載を割愛しております。

天野 雅弘 様	北村 公也 様	津幡 佳伸 様	本郷 輝明 様
石黒 萌真 様	劇団黒テント 様	中村 信太郎 様	谷島 康司 様
伊藤 以知郎 様	小出 幸夫 様	名倉 康雄 様	山口 明良 様
医療法人社団 盛翔会 様	小西 高志 様	根木 忠広 様	山田 笑美子 様
医療法人社団 ゆずり葉 様	小林 隆夫 様	長谷川 淳一 様	山本 幸 様
大房 香代子 様	静岡県医師協同組合 様	濱田 淳 様	吉岡 優 様
川北 かおり 様	高橋 伸江 様	浜松医科大学 看護学同窓会 様	
河田 光弘 様	竹内 宏一 様	坂東 誠一 様	
川出 芳彦 様	田島 良雄 様	藤井 一彦 様	
	田中 良明 様	堀田 喜裕 様	

ご寄附のお申し込みについて

電話、FAX、またはメールでお名前とご住所をお知らせください。ご寄附に必要な書類をお送りいたします。
浜松医科大学基金ホームページでは、クレジットカードでのご寄附も受け付けております。

お問い合わせ先

浜松医科大学基金事務局 総務課広報室 広報・基金係
〒431-3192 浜松市中央区半田山一丁目20番1号 TEL: 053-435-2107 FAX: 053-435-2112 E-mail: kikin@hama-med.ac.jp



浜松医科大学基金ホームページ
<https://www.hama-med.ac.jp/kikin/index.html>

編集後記

本号ではさまざまな本学の防災への取り組みを取り上げました。地域の医療の拠点である本学では災害対策は最重要事項の一つであることは言を俟ちません。防災士資格は今後全学生に広げられるとよいですね。その他、本号も興味深い研究や浜医大生のさまざまな活動の記事など内容盛りだくさんです。どうぞお楽しみください。最後に、小生、長い間編集委員をしてきましたが本年度で引退です。光陰矢の如しこれまでの紙面の変遷を実感しています。変わらぬご愛顧ありがとうございました。引き続きニュースレターへのご支援のほどよろしく願いいたします。

ニュースレター編集委員 T.N.



浜松医科大学マスコットキャラクター
はんだやまっぴー

編集・発行 浜松医科大学ニュースレター編集委員会

発行日 2026年3月1日

ニュースレターに関するお問い合わせ

国立大学法人浜松医科大学 総務課広報室
〒431-3192 静岡県浜松市中央区半田山一丁目20番1号
TEL: 053-435-2151
E-mail: koho@hama-med.ac.jp

ニュースレター
バックナンバー



Facebook



Instagram



YouTube



ニュースレター 読者アンケートご協力をお願い

ニュースレターでは、読者の皆様に親しみやすい誌面づくりを目指しています。つきましては、本誌をご覧になった感想やご意見・ご要望など以下アンケートフォームよりお聞かせください。ご協力のほど、何卒よろしく願い申し上げます。

アンケートは
こちらから



今アンケートにご協力いただいた方に**浜松医大オリジナルグッズをプレゼントいたします!**(お一人様1つまで)

ご希望の場合は、アンケートの最後にお名前と郵送先のご住所をご記入ください。
※ご記入いただいた個人情報は郵送手続きにのみ使用いたします。